

図書名	受験番号	氏名
新人保育者物語 くら		

「新人保育者物語 くら」を読んで、保育者としてのリアルな問題を感じることができました。私は今まで、保育士を目指すにあたって、大事だと思ってたことは、子どもの目線になって子どもと同じ目線で子どもと向き合うことだと考えていました。子どもの目線になって考えることの大切さを、この本を読むことによって、より具体的に感じる事ができました。

例えば、第4章でチームワークを乱す、ぐわくんという幼児に対して、新人保育士くらは困った行動が多い「問題児」としておなっていました。しかし、ぐわくんはチームワークを乱し、先生を困らせたいわけではなく、今、自分がしたいことに夢中になって遊んでいるだけだということに、くらは、ぐわくんの立場、目線になって考えることで、気付くことができたのです。そして、そのぐわくんの今遊びたいという気持ちを尊重してあげることで、ぐわくんは「今日とっても楽しかった！」と笑顔でくらに報告しました。くらは、ぐわくんがみんなを困らせるためにワガママを言っているわけではなく、人一倍物事に夢中になれる力を持っている子なのだという事に気付くことができたのです。

また、第9章では、ケンカをした子ども達の泣いてしまった子をかばったくらと、その過程を判断して、状況を見極めて二人のお互いに悪かった所を理解させた葵先生の対応が対照的に描かれていました。また、女の子二人に仲間に入れてもらえなかったのんちゃんをくらは仲を取りもとうとしました。しかし葵先生は「今は二人で遊びたい」という女の子達の気持ちを尊重し、のんちゃんを他の遊びに誘導しました。葵先生は、のんちゃんの家族構成や話せばわかるというのんちゃんの性質を理解した上で対応をしました。

このように、第9章では、子ども同士のトラブルなどを保育士が解決する場合、その問題がどう起ってそういった結果になったのか、という過程をきちんと見極めて対応するべきということ、子どもの様子や家族構成、発達、興味のあること、関心のあることなど、総合的に考えて適切に対応をするのが大切だということでした。

このように二つの事例から、保育をする上で子どもを一方から見るのではなく、両方向から見、その中で状況を見極めて判断していくことが子どもにとって良い環境へつながると共に子どもの個性を伸ばすことができる、子どもと向き合う一番いい方法だということが実感できました。以前、FBCテレビで放送されていた「幼児の世界」という番組がありました。子どもの行動や性質における保護者からの相談というのを受け付け、それに専門家が答えるという内容の番組でしたが、子どもの発達や成長、性質、行動等における問題、悩みは本当に様々なで、たくさんの相談が寄せられていました。やはり、やっぱり子どもの目線で

図 書 名	受 験 番 号	氏 名

相手の立場に立つ考える。そして子どもの実態、環境や状況に合った適切な柔軟な対応が必要であるということを重要視している回答が胸に受けられました。

この本から、保育者として、子どもに接する保育というのは自分たちの保育法を見つけていかねばならないと感じました。しかし、そのためには、子どもの実態、環境や状況、その子の性質など、子どもをよく観察する。そしてその子の立場、目線に合った柔軟な対応をすることが自分の保育法を見つける中で大事なことがあると、この本を読んで実感しました。